

心に残ったものは大切にしまっておく。そんなことを考えていた私がいる。

湖の周りに宿る魔力が中央にある泉の噴水に集中して光を集めている。

その光景が心に残ってしまったのだ。

昔、私が子供のときに見た光景と同じだったのだ。

雲に突き刺さる光もその泉を祝福するかのように浴びせかける。光のシャワーとも言えるのだろうか。

美しき世界の中央と、まるで縮図かのようにここにある。

空から雨が降ってきて私の頬に伝うのは涙かそれとも雨か。

今の私にはわからない。

だけど、子供の頃、両親の手を握って飴を舐めて道路を見ていると車が走って来た。

その速さと同じくらい理解が早かった。

誰かが心にいると。

子供の頃から周りの人たちと同調をすることが苦手だった私はずっと遊ぶことが出来なかった。

でも一人だけいてくれた子がいた。

今でもその子はどこかにいるのだろう。いずれ出会いたいと考えている。

それだけずっといてくれた。心を支えてくれた。今でもその光景を見せることによって私に

見守っているよと教えられたのだ。

ならば今度は私から探しに行かないといけないと考えた。

そんなことを考えている私がいる。そしていつまでも一緒にいられるように。

約束をしよう。

そこはどんなところだったのか。そこはどんな光が見えるのか。

もしかしたら、希望なのかもしれない。泉から水が湧き溢れるかのように希望が現れるのか  
もしれない。

これから私は家に帰るが、それは果たして綺麗な気持ちになれるのかどうか。

それだけはわからない。だけど、それは希望を作った人のことなのかもしれない。

異世界。そこにその子はいる。いつまでも一緒にいてくれた。

今度は私の番。ずっと遊んでいたことを謝らないといけない。だから。

二人でいつまでも一緒に暮らそうね。

その一言が心の中に響いた、そんな気がした。そして泉に集中する光のように私に光が差し  
込み始めた。

それはその子がいつまでも見守ってくれているのかもしれない、と思わせるような光量。  
光の上を見つめると、その子が。

私に微笑みかけていた。そして差し伸ばしてくれたその手を。

私は握った。もう、離すことはない。

いつも、私と遊んでくれてありがとう。

だから、私は楽しかった。

いつも、私の手を握ってくれてありがとう。

だから、私は嬉しかった。

いつも、私を見守ってくれてありがとう。

だから、私は幸せです。

これからもそんな日々が続くなんて。

本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

幸せだと思う。仕合わせだと信じている。

だから、その手を握り離さないことはずっと続く信頼の証。

ありがとう、ありがとう！

いつまでも。

一緒にいようね！

私はゆつくりとその子と一緒に空へと昇っていった。

その光景を誰も見ていない。

だけど、それでいい。

幸せな人と居られることが一番の大切なことだと知っているから。

行ってきます。

泉の周りに明かりが灯される。間もなく、カーニバルが始まる。

楽しい感謝祭とも言えいいのだろうか。そこにはもう。

魔力と光はなかった。

それを知っているものは誰も。

いなかった——。